

「憐れむ神に遣わされ、憐れむ神に結ばれる」

(マタイによる福音書9:35-10:15)

聖霊降臨日、三位一体主日を経て、長い緑の期節が始まりました。この緑の期節、日々出かけ、人々に天の国を示された主イエスの旅に、わたしたちは同行します。この旅の中で、わたしたちが主イエスの横顔や後ろ姿を見つつ、天の国を垣間見ることができますように。

今週は旧約聖書の中でも非常に重要な箇所が読まれます。神はモーセを通してイスラエルの民に告げます。「あなたたちはすべての民の間であってわたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。」祭司は神と人とを結ぶ働きを担います。神がイスラエルを選んだのは、「すべての民」のために神に執り成しをする祭司の任務に当たらせるためだったのです。今日の福音書で紹介される使徒の数、「十二」という数字はイスラエルの十二部族に基づいています(マタイ19:28参照)。ここに、かつてイスラエルの民に委ねられた祭司の働きが、新たなイスラエルとしての新約の民に受け継がれたことが示されています。そして、主イエスによって派遣された新しいイスラエルとしての十二使徒から教会が始まり、「すべての民」への救いの使命は脈々と引き継がれています。

このことは、先週の福音、マタイによる福音書のクライマックスの「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。」という大宣教命令にも明らかです。十二使徒、そして教会はこうして、主イエスがこの世でなさったお働きを引き継いでいきます。主イエスは昇天後も、ご自分の使命と権能を十二人に、そして教会に引き継ぐことで、「わたしは世の終わりまであなたがたと共にいる」という約束を実現されているのです。なぜなら教会は主イエスから引き継がれた働きを担うからこそ、人々は今このときにも教会を通して主イエスと出会うことができるのであり、そしてそのためにこそ、教会はこの世界に存在するからです。

主イエスのなさった癒やしや悪霊追放の業は、その「思い」に基づくものでした。それは、「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」という、「憐れみの思い」です。主イエスがなさった業は、この憐れみに基づくものです。憐れみと訳されているのは、「はらわた」を意味する名詞から派生した単語です。古代の人々は心臓を理性や意志の働く場所として考え、「はらわた、内臓」を感情の座として捉えていたようです。中国の故事による「断腸の思い」という言葉にもそのような感覚が読み取れます。主イエスの「憐れみ」とは、腸がちぎれる程の痛みを伴うものだったと想像することができます。弱り果て、地にうなだれこむ群衆を見つめる主イエスの眼差し。そしてその思い、共感、共苦のいかに深いことでしょうか。

「飼い主のいない羊」とは、民数記27:17にて、死の宣告を受けたモーセが、民を「飼う者のいない羊の群れのように」しないでください、と神に祈り、自分に代わる指導者を求める場面でのセリフと重なります。このモーセの祈りを聞かれた神は、あらたにイスラエルの民の導き手としてヨシュアを選び出します。ちなみに、ヨシュアのギリシャ語形は「イエス」ですから、飼い主のいない羊への神の思いが、かつてヨシュアを選び、後にイエスを遣わすことにより人間に届けられます。民数記と今日の福音との重要な符号点です。このときモーセの祈り、願いを聞かれた神の憐れみが、主イエスの「思い」と重なります。かつてモーセの祈りを聞き、民を深く憐れまれた神は今、子なる神としてはらわたを痛み、群衆を見つめています。その深い憐れみ、愛とは、今日の使徒書によれば、罪人のために自らの命を投げ出すことをも厭わないほどのもの、十字架上で「敵」のために命を差し出すほどのものです。主イエスはその深い憐れみにより、十字架上へ自らの命を差し出しました。十字架上の主イエスの姿は、弱り果て、打ちひしがれた人々、神に逆らう人々、あらゆる人に語りかけます。「あなたの命はわたしの命をささげるほどに尊い。」この十字架上の宣言こそ、「飼い主のいない羊」への神の思いに他なりません。それゆえに、この十字架を通してこそ、

すべての人は神の愛を知らされ、神に再び結ばれるのです。天と地の間にたてられたその十字架が、神とすべての人とを結びます。まさに、主イエスは十字架に上ることで、天と地を結ぶ祭司の役割を完全に果たされたのです。

そして、この主イエスの役割を、使徒たち、そして教会は受け継いでいます。その教会の働きは、自らの命をも差し出した主イエスの深い憐れみ、他者への深い共感、共苦の上になされなければならないのだということを、十字架の主イエスはわたしたちに教えています。主イエスの「思い」がそこにあるからこそ、使徒たち、そして教会は「天の国は近づいた」と宣言し、その使命を果たすことができます。そのために、わたしたち自身が日々、主イエスの「思い」に生かされ、励まされ、変えられなければ、わたしたちの働きは虚しいものになってしまいます。だからこそ、主イエスは派遣する弟子たちに何も持っていくことを許さなかったのでしょうか。金貨も銀貨も銅貨も、袋も、二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはなりません。袋は献金、寄付を入れる袋です。寄付が禁じられていたわけではありませんが、これを持ち歩くと、もしかしたら必要以上に溜め込んで、安心をお金で買ってしまいかも知れません。立派な聖堂を守ることにばかり気を遣い、聖堂のちょっとした傷には気付くのに、目の前の困っている人に気付かない、などということは教会の現実では往々にしてあることです。宣教と言いながら、お金のために働いてしまうということもありえます。何よりも、それらの持ち物が、深い憐れみ、共感することや共に苦しむことの妨げになるからこそ、主イエスは持っていくことを許さないのです。懐にパンを忍ばせておきながら、目の前の飢える人に、心底共感することができるでしょうか。神に祈るしかない人の隣に座することができるでしょうか。むしろそれを手放し、ただ、他者に、神に頼らなければ生きられない、そういうところにこそまことの「思い」が生じるのではないのでしょうか。

使徒たちは学問的にも、立派な弁論術もありませんでした。その彼らが何を伝えられるというのでしょうか。それこそ、彼らの姿、何も持たない姿そのものしかないのです。身なりや外見、知識ではなく、ただ他者に、そして神に信頼しようとするところから伝わるもの、香るものがある。悲しむ人の隣で差し出すお金は無くとも、共に泣くことができる。空腹の人に差し出すパンは無くとも、共に「日毎の糧をお与えください」と祈ることができる。その深い相手への思い、自らもはらわたに強い痛みを感じつつするその行いからこそ、にじみ出るものがあるのです。主イエスは、『平和があるように』と挨拶した先で拒まれたなら、その平和はあなたがたに帰ってくる、と言われました。なぜなら、拒まれたことで、今、不正義の中で打ちひしがれる人に共感する心が与えられるからです。その共感、共苦によって、あなたと今打ちひしがれている人は結ばれる、まことの平和がそこに生まれる、そう主イエスは言われているのです。さらに主イエスは、「あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようもしない者がいたら」その家や町よりも「ソドムやゴモラの地の方が軽い罰で済む。」と言われます。その家や町の人々は、他者を顧みず、他者と共にある豊かな命から離れてしまうからです。それは、ソドムやゴモラの人々よりも、人が生きる上では辛いことなのです。

「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」と主イエスは言われました。すべてのものは主の賜物、と毎週礼拝で言っておきながら、それを自らのためだけに用いるならば、そこに「天の国」はありません。わたしたちには、主からの賜物、深い思いがすでに注がれているのです。十字架上で手を広げておられる主イエスの「思い」は、他ならぬわたしたち一人ひとりに向けられているからです。わたしたちはそれをいただいているから、それを誰かに分かち合うことができます。十字架上で両手を広げる主イエスの姿を忘れず、わたしたちもまた、握りしめているものを手放し、両手を広げて他者と神とに向って参りましょう。「天の国は近づいた」と宣べ伝える旅へ、主イエスと共にあるその旅の中で、主イエスの憐れみにより養われ、変えられ、自らも与えられた役割を果たして行くことができますように。